

〈報告〉

女子大学の発展を探る

—アメリカ女子大学視察報告—

亀田 温子・橋本 ヒロ子
松本 侑壬子*

1. はじめに—新たな段階へ

2000年の今年は、神戸女学院大学創立125年、お茶の水女子大学創立110年、津田塾大学創立100年、東京女子医科大学創立100年、女子美術大学創立100年、そして2001年は日本女子大学が創立100年を迎える。日本における女子大学は、その前身も含め約100年の歴史を重ねている。1948年に新制大学制度が発足し、5校の女子大学（日本女子大学、津田塾大学、東京女子大学、聖心女子大学、神戸女学院大学）が認可されて以来、女子大学数は1960年に37大学（全大学比率15.1%）、70年に81大学（21.2%）、1980年に88大学（19.7%）、1990年に90大学（17.8%）、そして2000年には93大学（19.4%）にのぼる。このように、女子大学は1960年代に急増し、その後も多少増減を繰り返しながら、量的発展を見せている。80年代後半以降にみる女子大学の増加は、1950年に暫定的措置として誕生した女子短期大学が、4年制女子大学に転じたケースが多いといえる。ちなみに1996年に誕生した十文字学園女子大学もこれに該当する。またこの年は女子の4年制大学進学率が、これまで多数であった短期大学進学率を上回り、女子の4年制大学志向が明確になった年でもある。

一方、質的展開にも注目する必要がある。諸外国の動きをみてみよう。1970年代以降、フェミニズム運動の展開とともに女性に対する教育の促進、教育・知識における男性中心主義を見直す女性学（women's studies）の発展、教育における性差別の禁止など、女性に対するこれまでの教育自体を変えていく質的展開がみられる。これまでの「男は仕事・公的領域、女は家事育児・私的領域」という性別役割を再生産する「ジェンダー再生産教育」から、性別役割にとらわれず新たな可能性を生み出す教

* 今回の訪問はアメリカ国務省の国際訪問プログラム（The International Visitor Program of the United States Department of State）によった。その他の訪問者は十文字一夫理事長、福田弘副本部長、鶴木真非常勤講師（東大教授）の3名である。

育への転換である。

既存の社会構造の中で女性が量的に拡大することで問題は解決せず、構造それ自体を変えていく必要があることは教育においても同様である。変革の具体例が女性学の導入であり、女性に対する教育の展開は新たな段階を迎えている。

2. 目的と訪問先

こうした中で、女子大学としての本学の将来構想検討に資するため、日本より女子大学の長い歴史をもち女性学の発祥の地でもあるアメリカの女子大学を視察し、その現状をとらえた。視察時期は、2000年3月26日から4月2日。具体的には、次の3点を中心とし情報収集することを目的に、女子大学6校、共学大学2校、女性学関連機関2の合計10箇所を視察した。

- ① アメリカの女子大学は全体に減少傾向にあるが、1990年代に入り女子大学の学生数が増加に転じ、女子大学が再評価されはじめている。こうした状況の中で、女子大学として発展をみせている大学を例に、その内容と方策を探る。
- ② 女子大学を発展させることに寄与している女性学の教育・研究の内容、体制について調べる。
- ③ 十文字女子大学との単位互換など、交換学生プログラムについての条件や体制について、また短期・長期留学の可能性を探る。

訪問先は次の個所である。インタビューは教学に関する大学運営、女性学カリキュラム運営の中心となる教員に行った。(参考資料のリスト参照)

女子大学	概要	規模
① トリニティ・カレッジ	ワシントン都市部, 1897年設立 社会人学生多数, 本学と提携	フルタイム* 600人 パートタイム** 1200人
② スミス・カレッジ	ボストン郊外, 1875年設立 工学部新設による拡大発展	2500人
③ マウントホリヨーク・カレッジ	ボストン郊外, 1837年設立, 女性学をコアカリキュラム化 高校生夏季数学講座の開催	2200人
④ ウェルズリー・カレッジ (女性学学部)	ボストン郊外, 1875年開学 女性学, 工学, 女性学センター	3000人
⑤ ミルズ・カレッジ	オークランド郊外, 1885年設立, 女性学, フィールドワーク実習	1200人
⑥ シモンズ・カレッジ (経営学大学院)	ボストン都市部, 1899年設立, アメリカ唯一の女性のみ経営大学院	フルタイム* 70人 パートタイム** 280人

女子大学の発展を探る

女子大学	概 要	規 模
⑦ 〈共学大学〉 メリーランド大学 (女性学学部)	ワシントン郊外, 女性学関連 50 講座受講生 4000 人	32000 人
⑧ サンフランシスコ州立 大学 (女性学学部)	サンフランシスコ郊外 女性学主・副専攻	28000 人
⑨ 〈女性学機関〉 女子大学連合 (WWC)	73 の女子大学連合 (米国は 72), 1972 年設立 90 年代に女子大キャンペーン展開	
⑩ 全米女性学学会 (NWSA)	1977 年設立, 女性学関連学会, 女性学に関する 情報収集・提供	

* 通常の年限で卒業する学生

** 部分的に出席して通常の年限以上かけて卒業する学生

3. アメリカ女子高等教育の動向

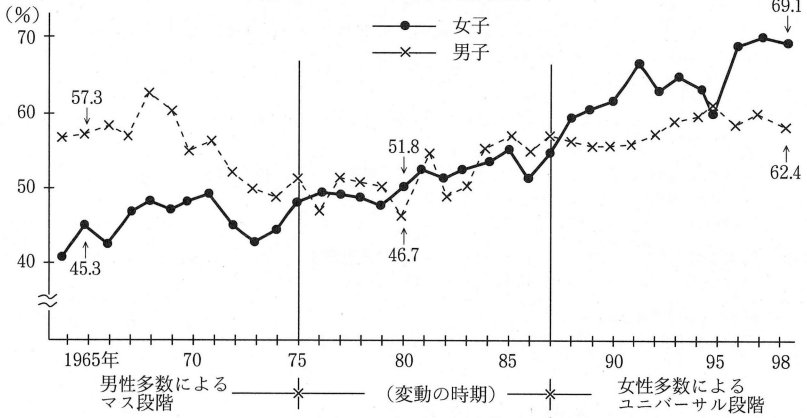
訪問先の大学について報告する前に、アメリカにおける高等教育の状況の中から、女子大学の動向と関連する事柄を捉えておこう。マーチン・トロウの高等教育の発展段階でとらえると、日本は現在、大学進学率 40% 台のマス段階から 50% 台のユニバーサル段階に突入した状況である。これに対してアメリカは 1980 年代半ばからユニバーサル段階に入っており、しかも 80 年代後半以降は女性の高等教育進学率が常に高く、現在は男女とも 60% 以上 (女子 69.1%, 男子 62.4%, 98 年現在) に達している。また 18 歳人口の減少の時期も日本よりはやく、いわゆる伝統的就学年齢に限らず幅広い年齢層が就学している。このように拡大、多様化し発展するアメリカの大学の中で、女性の大学進出、女子大学の状況を物語ることとして、次の 3 点が指摘できる。

(1) 量的拡大・女子多数のユニバーサル段階

図 1 は大学進学率の推移を示している。1960 年代にすでに進学率 40% を超えるマス段階となっているが、男女格差は非常に大きく男性は 50% を超える多数となっている。75 年から 85 年の変動期を経て、80 年代後半からは男女が逆転し、女性多数によるユニバーサル段階へと進んでいる。高等教育の拡大は、女性が多数であるいわゆるフェミニナイゼーションの過程を伴うものであったことがわかる¹⁾。図 2 により大学の種類別の状況を見ると、日本のように、4 年制と 2 年制大学 (短期大学) の男女比が大きく異なるということはなく、4 年制、2 年制、大学院の全てにおいて、75 年から 85 年の時期に女子が多数となるフェミニナイゼーションの動きがとらえられる。85 年以降も女子の増加が続いている。

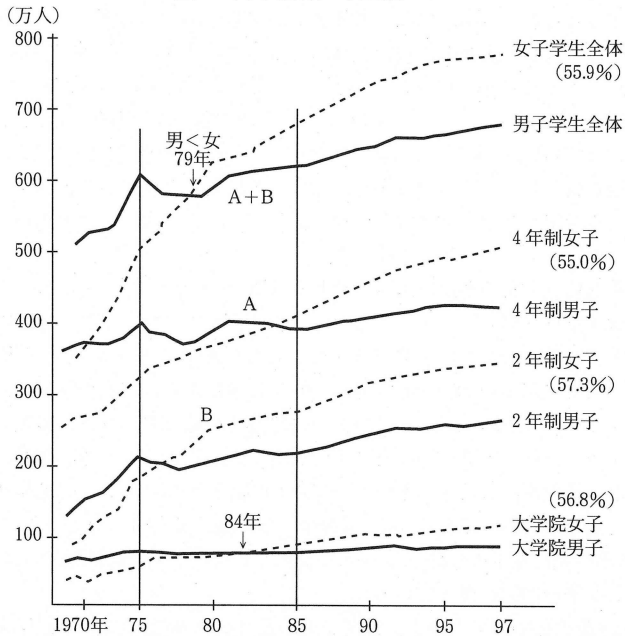
また 18 歳人口の減少を日本より早く迎えたアメリカでは、学生の年齢、就学の形態も多様である。パートタイム学生は 4 年制大学では 3 割以上、2 年制大学では 6 割

図1 アメリカの高等教育進学率



(出所) 「Digest of Education Statistics, 1999」 U.S. Department of Education より作成

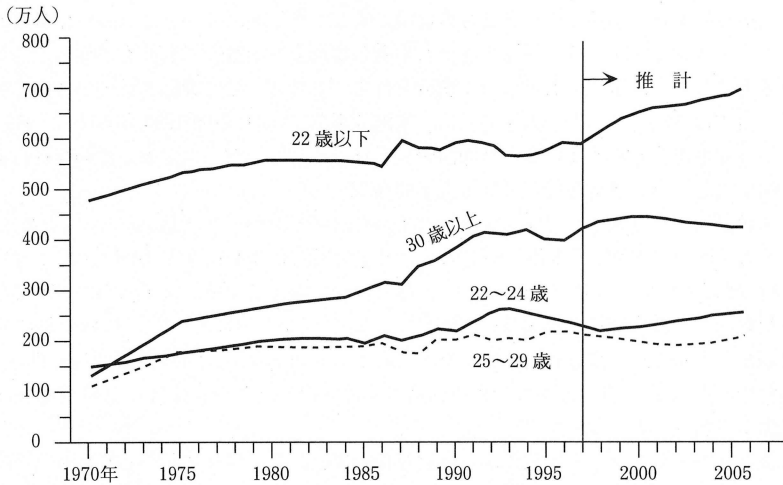
図2 高等教育，学生数



(出所) 図1の資料と同じ。() は女子学生の割合

女子大学の発展を探る

図3 高等教育の年齢別学生数(男女計)



(出所) 図1の資料と同じ。

以上にのぼり、増加傾向にある。18歳人口の就学だけではなく、図3を見てもわかるように社会人など多様な年齢層が就学しており、夜間や週末大学などがニーズに応じた重要な機能を果たしている。

(2) 男女共学の波

アメリカでは1960年代に約300校近く存在した女子大学・短期大学が、2000年には73大学と4分の1に減少した。男女共学化の第1の波は1970年代であり、タイトル9に示される性差別禁止条項を受けて1972年に改正された「教育改正法(教育における性差別禁止)」の影響による。これにより多数の女子大学が男女共学に移行していく。名門女子大学のバサール・カレッジは1971年に共学に移行したが、共学により大学としての質が低下し、回復に15年かかったといわれている。

第2の波は、新たな大学改革・発展を必要とする90年代である。今回訪問したスミス・カレッジ、ミルズ・カレッジなども、こうした時期に男女共学の議論を行っている。ミルズ・カレッジでは、1990年に理事会の男女共学決定に学生・教員が2週間にわたる反対のストライキを行い、東部のシモンズ・カレッジやウェルズリー・カレッジなどの女子大学もこれを支援した。その後は女子大学として存続している。

(3) 女子大学の再評価・女子大連合のキャンペーン

男女共学化の波をかぶり、女子大学は数としては減少傾向にあるが、90年代に入

り学生数が増加傾向を見せはじめた。小規模ではあるが女子大学の環境の良さ、女性に自信や様々な支援を提供できる教育環境、そしてウェルズリー・カレッジ出身のヒラリー・ロングダム・クリントン氏をはじめとして社会で活躍する女性を多数輩出している実績などが、現代の女性たちに求められている教育として評価されているのである。日本の新聞にも「女子大学の人気、米国で復活」(朝日新聞 1994年5月29日)という記事が報じられている。今回訪問した女子大学は、女子大学としての存在意義を明確にし、高い評価を受けている大学である。

再評価にあたり大きな役割を果たした1つに、キャンペーン活動がある。これには、女子大学連合(WWC、後述)やアメリカ大学女性協会(AAUW)などが中心となっていたもので、テレビやパンフレットなど多様な媒体を用い、女子大学の長所である教育内容、教育環境の充実などを述べている。「女子大学に入って、私は全世界を見通すことができるようになりました」「大きくて同じ大学」に対して、「小さくても特色ある大学」など、新たな視点に基づく選択肢を提供し、社会にその有効性を主張する大きな力となった。

また教育をジェンダーの視点から分析した結果として、男女共学が必ずしも女子のリーダーシップ養成や能力伸長につながらず、男性重視の教育環境のなかで女性が周辺におかれていることがわかった。こうした状況に対して、女性をエンパワーできるのが女子大学であり、それが再評価につながったのである。

4. なぜ女子大学は再評価されたのか—その要因

なぜ女子大学が90年代に再評価されたのだろうか。『アメリカの女性大学：危機の構造』²⁾では、自己点検報告書(self-study report)の分析から、女子大学存続の鍵として①教育環境、②ロールモデルの存在、③人材の生産性の高さ、の3点を指摘している。

今回の女子大学視察からは、さらに次の事項が指摘できる。

(1) 「女性学」との結びつきにより、女子大学の意義を明確化する

今回訪問した女子大学のほとんどが1970年代に男女共学の議論を行っているが、女子大学として存続し発展している。これらの女子大学は、女子の自立・社会進出を建学の精神とし、現在社会で活躍する卒業生を多数輩出している。発展の背景には、1970年代に誕生した「女性学」との結びつきがある。女性学を大学教育の中核とすることで機能を強化し、家庭役割に縛られず社会で活動する女性をエンパワーする教育機関として、その存在意義を明確化したのである。女子大学のイメージ、大学としての組織構造は、この時期大きく変貌している。

スミス・カレッジの「女性学の考え方はすべての学科に行き渡っている」という例にみるように、女性学コースをあらゆる学習の基礎に置き、さらに各学部の学習内容

女子大学の発展を探る

にジェンダーの視点を導入するカリキュラムをもつことで、リベラルアーツの基礎として女性学を位置づけている。女性学を主専攻または副専攻とすることも可能である。

リベラルアーツを教育の基礎とする女子大学では、女性学を学部として1つのセクションに置くのではなく、基礎コースとして位置づけ、すべての領域に女性学の視点を導入したカリキュラムを配している。女性学コースの専任教員数は3—5人程度と多くはないが、関連教員からなるコース運営委員会などが強い機能を発揮し、学部、学科とのつながりを強くしている。

(2) キャンペーン活動・関連組織の協力

先にも示したが、女子大学の再評価の背景には、女子大学が存続の危機を乗り越えるため積極的にキャンペーン活動を行ったことが大きな成果をもたらしている。この活動の中心となったのが、1972年に設立された女子大学連合である。現在は63の女子大学（アメリカは62大学）が加入しているが、こうした女子大学相互のネットワークの存在が新たな発展に向けての重要な力につながっている。女子大学が社会でより評価されるためには、個々の大学のみならず、こうした組織相互の協力が1つのキーとなっていることがわかる。

(3) 将来構想の検討・工学など新たな領域への発展

大学改革の時期にあたり、各大学の特徴などそのあり方が問われると同時に、どのようにして女子大学を発展させ学生を集めるかなど、将来構想との関連は大きい。今回訪問したスミス・カレッジでは「2020年計画」を策定し、女性の進出がこれまで少なかった自然科学の領域を拡大し、工学部新設という新たな挑戦をはじめている。ここでも「工学にジェンダー・マインドを入れる」ことを目指し、工学と女性学がつながる学習を基本にしている。これにより技術・工学系統の職業進出につながる道を広げることが可能となる。こうした検討を通して、学部の教員、スタッフ、学生などが大学のあり方について共通認識をもつことが重要である。

女子大学における専門領域は、かつての家政学、文学などから、ビジネス、ソーシャルワーク、社会科学、さらに工学系へと拡大・発展を見せている。マウントホリヨーク、ウェルズリーなどでも、物理学、数学、工学、コンピュータなどの領域に学習の幅を広げている。

(4) 都市型大学の社会人導入

アメリカの大学では学生の年齢・就学形態が多様化しているが、特に都市部の大学では社会人の導入を積極的に行い、大学の発展につなげている。ワシントン市内にあるトリニティ・カレッジ、ボストン市内にあるシモンズ・カレッジがこれに該当する。トリニティ・カレッジの週末大学は1983年に設置され、現在では学部学生数をはる

かに越え1200人以上が登録し、増加傾向にある。キャリアアップのための学習、子育て後の再就職にむけての学習など、女性の職業進出にともなう再教育の需要に答えている。大学も関連の施設を拡充する予定であり、成人層の導入が大学を発展に導いた例といえる。シモンズ・カレッジの経営学大学院には、仕事をもつ多数のパートタイム学生が在籍している。ビジネス世界で仕事をする女性たちのキャリアアップ、リーダーシップ養成を明確に打ち出すことで、女性のビジネス進出に大きく貢献している。

これら都市部の大学は、都市部に集まる女性たちの社会進出に伴う再教育の需要をうまく捉えることで、18歳人口だけに頼らず入学者層を拡大することに成功している。

(5) 小人数教育・ロールモデルをもつ大学組織

90年代に女子大学の学生数が増加し、学生の質も上がってきたのは、女性学教育の基本となる小人数教育がキャンペーンなどを通して評価されたことによる。「大きくて同じ大学ではなく、小さくて教育環境の良い大学」という状況が、学生自身の満足度を高め、落ちこぼれを無くし、就職につても高い成果をあげている。

こうした女子大学の組織をみると、教員の55%、学長の90%が女性である。例えばウェルズリー・カレッジは1875年の設立当初から理事には女性と男性が携わっていたが、教育と大学経営は女性のみ、学長は歴代女性である。男性教員の多かったスミス・カレッジでも1975年に女性学長が誕生し、女子大学としての意義を明確にしている。また社会で活躍する先輩女性が身近に多数いることは、女子学生にとって重要なロールモデルをもつことになる。女子大学は女性が学生であるというだけでなく、大学組織においても女性が中心となっていることがわかる。

(6) 大学連合による単位互換

小規模の女子大学にとって、他大学と連合しカリキュラムを多様にすることは、相互にプラスに機能する。スミス・カレッジ、マウントホリヨーク・カレッジなどに東部5大学によるコンソーシアムがある。単位互換をはじめとし、共同セミナーや教育・研究のための共同施設利用が行われている。さらに5大学による女性学センターが1991年にマウントホリヨークに設立され、共同セミナーの実施など多様な活動につながっている。

また西部のミルズ・カレッジはカリフォルニア州の大学連合に加入し、カリフォルニア大学バークレー校などとの交流・単位互換、東部のスミスやマウントホリヨークとの学生交換制度などもあり、学外との単位互換がすすんでいる。

(7) 高校生・同窓生とのつながりを強める

マウントホリヨーク・カレッジでは数学の夏期教室、シモンズ・カレッジでも高校生を対象にした夏期セミナーなどをおこない、高校生層に大学を積極的にアピールし

女子大学の発展を探る

ている。一方卒業生は、寄付や募金活動により大学に様々なサポートをしている。マウントホリヨーク・カレッジでは1998年から2003年までに200万ドルの寄付キャンペーンが打ち出され、スミス・カレッジでも工学部設立にあたり卒業生の寄付が活用されている。女子大学は職業社会で活躍し社会的地位も高い人材を多数送り出しており、こうした女性たちの活躍が、次世代の女性の教育を支援するという循環ができている。就学期間だけでなく、入学前、卒業後の太いパイプが大学を強く支えている。

5. 大学・機関の現状

今回の女子大学視察に基づき、女子大学の評価要因として前述のような事項を見出すことができた。次に視察インタビューの話を中心に、個々の大学がどのような発展をみせているか、大学・機関ごとの報告を行う。

(1) トリニティ・カレッジ (Trinity College)

① 設置の経緯と概要

1897年にノートルダムのカトリック尼僧たちにより、アメリカで最初の人文科学系女子大学として設立された。当時ほとんどのカトリック系大学は女性を受け入れなかったため設立されたが、1900年11月まで学生は入学せず、1904年に一期生が卒業した。宗教を強制しないので、教員は必ずしもカトリックでなくてかまわない。イスラム教やユダヤ教の教員・学生も在学している⁽³⁾。なお、教員の3分の1が男性である。

ワシントンD.C.に所在という立地条件を生かして、国会議員事務所へのインターン、国会図書館の実験室の利用、メリーランド大学、アメリカ大学、ジョージタウン大学など地域の有名11大学によるコンソーシアムの1員として、学生は他大学授業の受講など行っている。大きな特徴としては週末大学を1983年から併設しており、現在では週末の方が学生数が多くなっているということが挙げられる。また、修士過程の共学大学院のほか、特徴あるセンターとして公共政策における女性研究所、クララ・ブルック数学自然科学プログラムなども設置している。女子大学で形成している公共リーダーシップ教育ネットワーク (PLEN) コンソーシアムのメンバーとして、トリニティの学生はPLENが主催する国内外のセミナーなどに各国の女性指導者と一緒に学生割引で参加できる。また、社会的に活躍している卒業生を在学生のメンターとして活用するシステムも持っている。

② 教育内容

ウィークデーの科目は以下の通りである。学生は大体18歳から22歳となっている。週末大学は1983年に設置され、金曜日の夕方から土曜日で、学生の年齢は25～55歳と幅がある。トリニティで物理科学もしくは数学を3年学習し、ジョージタウン大学に移籍して工学を2年間専攻することにより、トリニティからBA、ジョージタウン

から BS の資格を授与される工学二重学位プログラムがある。

- ・専攻分野：美術史、生物学、経営学、化学・生化学、コミュニケーション、経済学、教育、工学、英語、環境科学、歴史、人間関係、国際研究、語学・文化研究、数学、政治学、心理学、社会学
- ・副専攻分野：上記のほか、家族及び公共政策、女性学など

大学院は、もともとウィークデーだけであったが、強い希望により週末にも需要の高い分野で開始を予定している。

インターンシップを必要としている科目では、ワシントン D.C. にある議会、各省市庁、研究所など 600 以上の機関と連携し、それらをデータベース化している。インターンシップ希望学生の担当教員が連絡および指導を行っている。

③ 学生の内訳・志望理由等

入学希望者は昨年から増加しており、母親が娘に進める場合が多い。その関連で、同窓会の果たす役割が大きい。ウィークデーの学生は毎年 150 人程度入学し、そのうち 100 人が卒業する。3 分の 1 が編入生で、その中には多様なバックグラウンドを持った学生も多い。卒業生の進路としては、医学部への進学、企業、政府、NGO などとなっている。

卒業に最低 5 年間を必要とする週末学生は、現在 1200 人が在籍し、ウィークデー学生数より多く、現在増加している。週末の時間帯は、金曜日 18:30~21:30、土曜日 8:30~11:30、12:00~15:00、15:30~18:30 となっている。

週末学生たちが、トリニティ・カレッジへ入学した理由は多様であるが、10%以上が「キャリア変更」を挙げ、「個人的な向上」、「職場での昇進のため」、「子どもの大学卒業など契機に自分の生き方を変えるため」、「退職後の勉強」が続いている。

留学生として入学するには、TOEFL スコア 500 が最低必要である。500 はアメリカの大学では低いほうだが、小人数教育をしているため、力が伸び修学が可能だということである。スコアが 500 以下の場合、就学ビザを保持するには、1 セメスターに最低 12 単位を取ることが必要だが、あまり英語力が低いとそれが不可能であるため、スコアは最低 500 は必要としている。

④ トリニティ・カレッジにおける教育の特徴

トリニティ・カレッジにおける教育の特徴としては次のことが挙げられる。

- (i) 小人数によるきめ細かい教育により、付加価値を付けることが可能。文章の書き方に始まって就職用の履歴書、志望書の書き方の指導等も行っている。学生対教員の割合は 10 対 1 であり、平均のクラスサイズは 15 人となっている。
- (ii) 成人女性の学習の需要に沿って多様なカリキュラムを提供
- (iii) 編入方針が柔軟（できるだけ取得単位を認定する方針。広島市のノートルダム

女子大学の発展を探る

清心女子短大英文科から美術史学科に編入した学生は同短大での取得単位 80 単位のうち 72 が取得単位として認定された (B 以上が認定される。卒業のための必要単位数は 128)。

- (iv) 徹底した個人指導。アカデミックアドバイザーが学生一人あたり週 30 分は指導している。
- (v) サポートサービス。コンピュータによるサポートサービスも含む。
- (vi) 子供を持つ学生のための託児サービス
- (vii) サマーコース (2 週間 3 単位) の提供：教員は 10 ヶ月契約なのでサマープログラムで教える等臨時収入となる。ワシントンには講師候補者となる Ph.D. 取得者が多いため、講師として専門家を得やすい。
- (viii) Web コースの提供：環境に関するコースはコストリカで合流して授業を行う。アカデミックアドバイザーは対象学生によって次のような役割分担となっている。

ア ウィークデーの学生

1 年生：専門的なアドバイザー、2~4 年生：担当教員

イ ウィークエンドの学生

アドバイザーは専門家 (問題をもっている学生が多いため、また教員は休日出勤していない)。

(2) スミス・カレッジ (Smith College)

① 沿革・現状

新しい時代に向けて、スミス・カレッジは現在大きな変化の時を迎え動きは始めている。2020 年を想定した将来構想をつくり、これまでに女性の進出の少ない工学部門を 2000 年秋に立ち上げ、女子大学初の工学部を開設する。名門女子大学といえども新たな展開を必要とされる状況である。工学や経済関連、政府機関の公的領域などへの女性の社会進出を目指しているが、教育方針は職業教育ではなくあくまで人間教育である。

開学は 1875 年、ソフィア・スミスという女性の遺志にもとづき創設された女子大学であり、州外からも学生を集める全米的リベラルアーツ・カレッジとして高い評価を得ている。1970 年代の社会運動、性差別禁止法などにより男女共学化が検討され、また 90 年代の女子大学減少の中でも男女共学化が再度検討された。しかし、75 年には女性学長 (学長の任期は 10 年) が誕生し、その後女子大学としての意義を再確認し、女性学や工学を導入することにより発展を続ける。

② 教育環境

学生数は 2500 人程度であり、州外から、さらに海外からも多くの留学生が入学す

る全米的規模の大学である。郊外地域であるため、社会人やパートタイム学生はきわめて少ない。リベラルアーツ・カレッジであることを基本としているが、大学院の学位プログラムもおかれており、ここでは男子学生をうけいれている。教員1人に学生10人と少人数教育を実施。教員構成はほぼ男女半々である。

卒業生はビジネス業界、メディア業界、教育界など社会の多様な領域で活躍し、社会進出する女性を数多く輩出している。そうした実態が1つのロールモデルともなり、優秀な女子学生を集める力となっている。学内には卒業生の寄付によりつくられた建物もあり、卒業生たち女性の力が女子大学を支える重要な要因となっている。

③ 専攻領域の拡大—ソーシャルワーク、女性学、工学へ—

専攻領域の拡大は大学の発展につながる事柄である。スミス・カレッジでは80年代にソーシャルワークの領域を導入、さらに87年には女性学コースが設立された。「現在では女性学の考え方は、すべての学科に行き渡っている」という言葉からもわかるように、女性学コースの学習が既存の学問の在り方を見直す重要な要となり、女子大学の意義の明確化につながっている。

これまで女性の進出の少なかった工学領域に新たな発展をとげるため、21世紀に向けて再度大学認定をうけた。従来的一般工学に、バイオロジー、電子工学、環境学を加えてこれまでにない工学部門を立ち上げる。ここでも「工学にジェンダー・マインドを入れる」というかたちで、既存のものとは異なり工学と女性学がつながる教育をめざしている。

大学院は、コンピューター部門の修士課程はあるが工学部門はまだおかれておらず、21世紀の大学にとって重要性が指摘・認識されている。

④ 将来構想・2020計画

将来展望については、学部メンバーが中心となり自己評価委員会 (self-study steering committee) が組織され検討をおこなっている。共学化傾向、学生確保、大学存続など多様な問題をかかえるなかで、女子大学としてスミスカレッジがどのような方向を目指すかが議論され、1997年には将来構想「Envisioning Our Future: Smith 2020」がだされた。200を上回る様々な提案がなされ、21世紀にむけた教育としてこれまで女性の進出の少なかった科学・技術領域に注目し、コストはかかるが工学部門新設が提案された。しかし大学の基本はあくまでもリベラル・アーツにおいている。

21世紀の教育として、科学技術における女性の進出、海外でのインターンシップなど世界に視野を広げた大学、実務経験を重視しすべての学生にインターンシップを実施、高度な学習をささえるコンピュータ能力、図書館など大学施設の整備などを目指している。

女子大学の発展を探る

⑤ 女性学コース

1987年に女性学コースがつくられた。99年秋コースでは30科目、2000年春コースでは33科目(1科目4単位)が開講されている。女性学入門(1,2年生)からジェンダー論、セクシュアリティ論、文化論、歴史学、文学、法学、経済学、家族や親子関係論、社会変動などの社会学、心理学、メディア、教育、身体、スポーツ、芸術、さらにアフリカやラテンアメリカの女性などポスト・コロニアリズムに関するテーマもある。

学生は各学科の学習を行うと同時に、女性学の視点からより幅広くその領域の学習を進めることができる。たとえば工学部門についても、既存のものとは異なり工学と女性学がつながる学習をめざしている。こうした女性学コースの学習が、既存の学問の在り方を見直し、女性の社会進出を可能にする重要な要となっている。

⑥ 大学連合(コンソーシアム)

スミス、アムハースト、ハンプシャー、マウントホリヨーク、マサチューセッツの5大学による連合で、単位互換をはじめとし共同セミナー、教育・研究のための施設利用などが可能である。さらに5大学女性学センターは1991年にマウントホリヨークに設立され、共同セミナーもおこなっている。

(3) マウントホリヨーク・カレッジ (Mount Holyoke College)

① 設置の経緯と概況

1837年に3年制セミナリーとして設立され、1861年に4年制大学に拡大したアメリカで最古の女子大学で、セブン・シスターズの中でも最も古い歴史を有する。女性教員養成特に理数系教員養成として著名となった。学部の中では理学部の歴史が最も古く、創設時にすでに実験室を設置していた。1925年までは大学教員は全て女性だった。19世紀の初期には理系を専攻した女性は職を得られなかったが、マウントホリヨークの教職には就けた。ちなみに、同時期スミス女子大学の教員は全て男性だった。

2003年から始める基金増加も含む事業計画のため、卒業生を中心として寄付金200百万ドルを集めるための「マウントホリヨークキャンペーン 1998-2003」が継続中である。すでに卒業生の50%が毎年醸金をしている。

② 学生数等

学部生は、1999年11月現在2,192名で、49州から入学している。そのうち1850人がキャンパス内寄宿舎に住み、約200人のolder students(いわゆる社会人学生)がキャンパス外に住む。総学生数の13%は76カ国からの留学生で、教員一人あたり学生数は1対10である。

マウントホリヨークの卒業生から多くの理科系分野におけるPh. D.を取った女性

を輩出しているが、マウントホリヨーク・カレッジ自体は学部生を中心とした大学である。女子生徒のマウントホリヨーク等女子大学への進学状況は改善している。どこの高校にマウントホリヨークへの進学を希望している女子生徒がどの程度存在するかを的確に把握している職員が効果的なリクルート活動を行っている。女子生徒の親は、女子大学に娘を進ませると、「女子大学のクラスは双方向的で、学生はより協力的になり、学生は共学校より真剣に学んでいる」と信じている。一方、女子生徒の方は共学に進みたがるという傾向もあるが、全進学希望者のうち4%は女子大への進学を希望している。一方、女子大進学者数は大学進学者の4%に満たないので、女子大学への進学希望者が共学進学希望者より割合が高いと言える。

③ 女性学講座およびその他の特色ある教育

(i) 女性学講座 (Department)

専任教員1 (自然科学の専攻), 兼任2

女性学運営委員会はコア・カリキュラムが組めるように多様な講座からの委員10名で構成し、開催は1 Semester 1回となっている。

「女性学入門」では、様々な学問分野の女性学への異なった方法論、アプローチを紹介する。女性学教育に熟練した教員とともに、そうでない教員が担当して女性学教育の方法論アプローチなど学ぶ。

(ii) 女子高校生を対象とした夏休みの数学教室の開催

NSF (National Science Foundation) の調査によると、女子学生で数学が不得意な最大の理由は、数学担当教師の多くが男性であること、クラスで男子学生優先となっていることである。そのため、マウントホリヨーク・カレッジでは女子生徒だけを集め、女性の教師が数学を教える夏季講座を開催し好評となっている。

(4) ウェルズリー・カレッジ (Wellesley College)

① 沿革・現状

1875年開学。創立者ヘンリー・デュラン、ポーリン・デュラン夫妻の女子大学創設の基本思想は、女性が自立し自分の道を切り開き社会にはばたくことを目指しており、「女性は仕事ができる。だからチャンスを与えたい」の言葉を残している。開学当初より女性の学長によって大学が運営され、また物理学の研究施設をつくるなど理科系領域に力をいれていた。

1970年代には、他の女子大学と同様男女共学の議論がなされたが、1979年には女性学センターを設立、学部には物理や化学を導入、女性学学部開設、1985年にはコンピューターを主専攻(メジャー)とし、女子大学としての存続意義を明確にしている。大学評価においても、全米的リベラル・アーツ・カレッジ部門で常に上位を占める、高い評価をうけている。大学院はおかずに、マサチューセッツ工科大学などとの交流

女子大学の発展を探る

をはじめとし、高いレベルの他大学大学院に学生を送っている。

② 学生・教員数

学生は学部学生 3000 人程度。海外からの留学生も多く、現在学生の 13%がアジア系である。パートタイム学生は少ない。専攻は、例えば女性学と心理学などダブル・メジャーのシステムである。学生 10 人に教員 1 名と少数教育が可能であり、教員の男女比率は半々となっている。

③ ウェルズリー・アイデンティティ

ヒラリー・クリントンをはじめとし、建学精神である自立し社会で活動する女性を数多く輩出しつづけている。在學生は女子大学として歩んできたウェルズリーの歴史から学び、いま何をするか、どのように考えるか、自分をどのようにとらえるかなどを学ぶ。卒業生が大きな力をもつと同時に、女子学生にとっての重要な役割モデルとなっている。大学の伝統から学ぶこうしたことを「ウェルズリー・アイデンティティ」と呼んでおり、学生たちの意識形成に与えるインパクトは大きい。

④ 女性学学部の状況

女性学学部の入学者は現在増加傾向にあり、6,7 年前の 2 倍近くになっている。理由としては、女性学の学習が多様で学習効果のある教授方法を重視していることと関係があるが、女性学の学際性が現代的で多くの関心をよび、海外から女性学を学びにくる学生も数が多い。名称は、学際的、ラディカルであるということから Women's Studies を用いており、Gender Studies は用いていない。

教員は 7 名で、専任教員と客員 2 名である。月に 1 回、学内の女性学に関連する教員・関連スタッフが 15 名程度集まり情報交換を行い、教授方法などの検討を重ねるなど、学内の連携がとれている。

授業内容を示した「Women's Studies Department/March 3, 2000」のシラバスによると、2000 年春の開講科目は 30 前後に及び、「女性学入門」にはじまり、家族、国家と社会政策、セクシュアリティの歴史、男女間の暴力、植民地時代以降の社会の発展における女性など、幅広い領域にわたっている。クラスは学生 25 人を最大とし、セミナーは 15 人の小規模システム。授業は週 2 回（1 回 70 分）行われるが、講義と調査、セミナー、グループ討論など、多様な方法がとられている。

⑤ 女性学センター

学部とは独立した組織として 1979 年に設立されたもので、全米の女性学センターの中でも中核的存在である。専任の調査研究員も多数在籍し、メロン財団などの助成を受け、多数の女性学研究成果をあげている。研究所はアメリカだけでなく、世界の

女性学研究者がメンバーとなる支援ネットワークをつくっており、研究成果の交流も盛んである。近年は心理学研究を行う学内の Stone Center と連合し、女性学センターとしての機能をより拡大している。

センターの存在は、リベラル・アーツの教育を基本とする大学においても研究部門に多くの予算をあて、研究においても画期的な成果を生み出すことができることを示している。大学全体を高いレベルに引き上げる重要な役割を果たしているといえる。

(5) ミルズ・カレッジ (Mills College)

① 沿革・概観

カリフォルニア州オークランドにあり、西部では最も古い名門女子大である。初めは女性のためのセミナリーとして1852年に創立、その後、1885年にカレッジとなった。ミルズ・カレッジが米国内から海外にまで一躍その名を轟かせたのは、1990年5月、「共学化」に反対する学生、教職員の全学ストライキによってであった。70年代以降減少し続ける学生数とそれに伴う財政難に悩みぬいた理事会がついに「共学化」による現状打開の方針を発表すると、翌日には本部建物は約400人の学生・教職員らの手で封鎖され、約2週間の反対闘争が行われた。闘争には直ちに同窓会が介入、学生側をなだめる一方、大学側には基本財産の上乗せ、年額寄付金の増額などの財政援助を約束し、結局「共学化」は回避された。それにしても、こうした卒業生たちの「金も口も出す」愛校心と実力の発揮のしかたは、今の日本の女子大では考えられないことである。

歴史を感じさせる並木道の奥の広大な芝生の上のキャンパスの中心にある本部建物「ミルズ・ホール」は設立当時のもので、現在も5階が学生の寮になっているなど居心地のよい家庭的な小規模校のよさを印象づけるものだった。「ホール」のゲストルームで「女性学」コースの専任ポッター教授らに話を聞いた。

② 規模・大学間交流

学生数は学部約700人、大学院約400人で合計1,100人。大学院の一部のみ共学であり男子学生は約20%いる。ミルズ・カレッジは州内の大学連合（コンソーシアム）に加入しており、近隣のカリフォルニア大学バークレー校など地域の他大学と交流している。例えば、日本語コースはミルズにはないので、学びたい学生はUCバークレーに行っている。東部の女子大のマウント・ホリヨークとスミス・カレッジとは学生交換制（Reciprocal Exchange System）がある。ただし、この制度は互いに3年間で数のバランスが崩れたままなら止めることになっている。日本とは今年（2000年）から初めて奈良女子大学と1～2人程度の交換で始めたところである。奈良女子大とは7年前に話が始まり、やっと今年実現した。他に香港の女子大とも1ヵ月ずつの短期交換を始めた。「当学は卒業生が強く、現状を何とかせねば、との思いを持ってい

女子大学の発展を探る

る」とのことだった。

③ 女性学の認知・確立

「女性学」は1976年以来カリキュラム化が進んだ。現在「女性学」関連コースは20～25あり、95人のファカルティが担当している。専任はポッター教授一人だが、他学部のファカルティ・メンバーが参加しており、「学内で孤立していない」し、将来はさらに「自然科学」分野のプログラムの開発に力を注ぐ方針という。他学部のファカルティとの関係がここまで来るには容易でなかった。70年代当初は頻繁に会合を開いて討議はするものなかなかな分り合えず、しばしば論争状態になった。しかし、ときが経つにつれて「女性学」が確立してきて、関連科目をやりたい、私たちも協力したい、との申し出が相次ぎ非常にやりやすくなった。これが現在と70年代との大きな違いである。留学生向けの「English Center for International Women」コースには日本人学生もいるが、これは4人の英語教育教師が始めたものである。

④ カリキュラム内容

「女性学」専攻は14人(2000年現在)。学生は、学部3年間に「女性学」関連科目を最低60単位取る。教え方は、ワークショップやフェミニスト教授法によるものなどさまざまだが、フィールドワークも地の利を得ていて、例えば、ベイ・エリア地域で女性学専攻の分野の仕事、例えば、レイプクライシス(強姦救援)センターで電話を取る、少女の世話をするなど盛んである。NGOの仕事でビジネスに直結するものもある。

大学全体が伝統的年齢に限らずいろいろな段階や状況の女性たちの学びの場になっている。社会人学生は30%を占めるが、そのコースには「女性学」はまだない。広い美しいキャンパス内のこじんまりとした女子大だが、ミルズ・カレッジは日本のほか豪、英、仏、独、伊、西、露、中、イスラエル、ケニヤ、アイルランドの合計13カ国からの留学生を受け入れている。大学案内パンフレットには「小さい大学でよかった。私は500人の大教室の中で迷子になりたくないもの。」「ミルズで自分自身を知り、そして私は最後まで何かをやり遂げられることを学んだ」「ミルズには“私はできるんだ”と思わせる何かがある」といった学生たち自身の言葉が紹介されている。

(6) シモンズ・カレッジ・経営学大学院 (Simmons College)

① 沿革・現状

1899年にスーツをつくることからスタートしたシモンズ・カレッジは、約100年を迎える女子大学である。学生数の減少傾向は他の女子大学と同様であったが、そうした中で1974年に女子のみの経営学大学院(Graduate School of Management)を設置した。他の大学院部門は男女共学であるが、女子のみを対象とする経営大学院

はアメリカでも唯一である。学部には女性学コースが置かれており、組織におけるジェンダーの問題を研究する学内センターも設立されている。

ボストンの都市部にある5つの建物を大学教育施設として利用している。こうした地理的環境が、職業を持つ社会人女性の受け入れを可能とし、250人の学生は20歳代から50歳代までと幅広い層にわたっている。女性学をリベラル・アーツの基本教育として発展させた他の女子大学とは異なり、経営学の領域を特定し、すでに社会進出している女性たちのキャリアアップも含めた実践的な支援を行って成功したのがシモンズの例といえる。西部のミルズ・カレッジやウェルズリー、スミスなどからも経営学大学院への入学者がある。

② 大学院と女性のビジネス参入

制度的に女性の社会進出は可能となっているが、それを阻止する見えない「ガラスの天井」がアメリカにもやはり存在する。職場のルールや、経営、営業の方法などを職場の男性から学べない場合もあり、女性たちの学習の場が必要とされている。また、企業経営を行なう女性にとっても修士号は基本となっている今日の状況から、女性と職業に焦点を当てた学習は効果が大きく、女性を力づけることとなる。大学院の設置はこうした状況に対応するものとして大きな成果を出しており、女性の職業進出に関する雑誌などにもシモンズの卒業生は多数紹介されている⁴⁾。

③ 学生・教員

経営学大学院の学生は250人程度。フルタイム学生は8月から6月の1年間就学で、60～70人程度。就学が1年間であるため、カリキュラムは時間数、内容的にも厳しくかなりハードである。10年以上のキャリアをもつ女性も多数パートタイム学生として入学している。近年パートタイム学生が増加しており、大学全体の学生数増加につながっている。パートタイム学生は、夕方6時から授業が開始し、2年、3年をかけて履修をするケースもある。1クラスは15-16人程度。教員は35人で、女性が33人と女性多数であるが、これも学習の場が、女性自身の声を見つける場であることと関係がある。

④ 学習内容—リーダーシップ研修の重視

経済分析、財政学、マーケット論、意志決定のための財政分析、戦略とリーダーシップ、マネージメントと行動、コミュニケーション、キャリア開発など、多様な領域の学習プログラムが準備されている（資料在り）。これらの他にも、短期間の特別コースとして、「女性のためのリーダーシップ養成」「上級管理者のネットワーク」「交渉方法」「コミュニケーション技法」などが随時開設されている。

こうした学習とともにこの大学院が重視していることの1つに、職業社会で活躍し

女子大学の発展を探る

リーダーシップを発揮している女性たちをつなぎ大きな力にしていく「女性のための有効なリーダーシップ会議」がある。ビジネス界で活躍する先輩女性を多数招き、年に2回ほど研修を行う。若い女性たちにとっては、こうした先輩が重要な役割モデルとなり、職業生活の拡大・継続の大きな力となる。企業内において男性が管理職である場合、女性の職業活動に焦点を当てた研修は行なわれにくいので、ビジネス界に進出した女性が、男性上司とどのような関係性 (relation-ship) をとるかなどの学習も必要である。コーチやメンター制度についても、どのような方法がより有効かなど、女性の支援システムの検討がおこなわれている。

このようにビジネスに関係する領域を女性学の視点から見直し、女性にとっての実践的な力となる学習内容を提供することが、学生増加につながる要因と推測できる。

⑤ インターンシップ

地域のビジネス界との関わりも強く、学生にとっては就職につながる場合もあるため、インターンシップは教育上重要な役割をはたしている。具体的にビジネスについての考えかたを学んだり、技術的な事柄の学習にとっても必要である。協力の企業へ大学側は支払いを行なわないことが、基本となっている。

(7) メリーランド大学 (University of Maryland)

① 「女性学」開講の経緯と現状

東部メリーランド州にある共学大学であるが、女性学では内容、運営ともに全米でも評価が高い。「女性学」講座は1971年に初めて開講され、3講座を232人が受講した。約30年後の現在では4,000人の学生が年に約50講座を受講している。女性学(女性およびジェンダー関連学)を正規の科目として開講しているのは、アフロアメリカ学、美術史、古典学、比較文学、英語、演劇、外国語、政府と政治、歴史、文化人類学、ジャーナリズム、心理学、社会学、動物学など20学部・プログラムである。1994年には「女性学」は「学際的学位プログラムで、女性の社会的、政治的、文化的経験についての新しい学問へと導くもの」と位置づけられ、「伝統的な男女に関する知識を問い直し、女性同士の間には存在する違いを検証する」専攻科目となった。

「女性学部」の教員(ファカルティ)は教授6人(学部長含む)、準教授3人、助教授2人、アドバイザー1人、助手1人の専任13人(全員女性)に加えてその他の学部からの「女性学関連教員」が71人(男女)である。専任教員が女性学のコア部分を受け持ち、関連教員がそれぞれの分野で女性に関連する研究・教育を進めるという学際的アプローチが行われている。

② 運営(在り方)

大規模な共学大学で比較的后発の学部である女性学部だが、上記のように学内で学

際的に各分野にまたがり女性関連研究を推進する拠点となっている。こうした在り方が成功している最大の要因は「何と言っても大学上層部との協力関係がうまくいっていること」(学部長のクレア・モーゼス教授)である。例えば、学長の大学全体のビジョンに女性学の考えを持ち込んだこと。これにより大学全体のアカデミックなコンセプトに明確に方向付けができ、全学あげでの協力関係が得られている。このため他学部との間に齟齬がなく、「学内で孤立していない」(同教授)のである。

他学部とのスムーズな関係を保つためには、例えば、毎週学内の他学部との意見交換や打ち合わせを行っているほか、年に3回、例えば、有名な学者を2日間キャンパスに招いて女性問題に関する講演会を開き、翌日ファカルティでじっくり討論するなどの不断的の努力を続けている。季刊の学部機関紙「Bridging」も催し物、人事、人物往来、教員、学生の活動内容などきめ細かくトピックを拾い上げその名のとおり学内情報の橋渡し役を果たしている。モーゼス学部長の言うとおり、女性学部のコア・メンバーが牽引車となって男性・女性を問わず現代社会に必須の学問としての「女性学」の認識を根付かせ、大学の潤滑油的存在になっている。

メリーランド大学女性学部が米国内外での評価を高めているもう一つの大きな要因は、キャンパス内に置かれている全米女性学連盟(National Women's Studies Association=NWSA)とその機関紙「Feminist Studies」の存在である。

③ カリキュラム

講座内容は上述のように広い分野で多岐にわたっている。2000年度の〈履修の手引き〉に拠れば『基礎コース』7科目と『特別配分コース』45科目(学部)に大別される。『基礎』は「女性と社会」「女性、芸術と文化」「フェミニスト教授法」「フェミニズム理論」「職場のフェミニスト的分析」など、“女性学への道しるべ”的な内容である。『特別コース』には“芸術・文学”(分野Ⅰ)として「女性の文学作品」などの現代、古典文学と女性に関する講座や「文学、オペラ、映画の中のファム・ファタールと暴力表現」といった芸術・文化と女性を扱うものが14講座、“歴史的展望”(分野Ⅱ)として「米国史における黒人女性」「1800年以前のアメリカ女性」「米国のジェンダー・アイデンティティ認識の変遷」といった米国の女性の歩みを学ぶもの、「古代の女性」「中世の文化と社会における女性」「歴史的論文のための女性史」といった歴史的展望の中で女性の位置づけを確認するものが13講座、そして“社会・自然科学”(分野Ⅲ)として「再生産の生物学」「女性心理学」「犯罪学と犯罪裁判に関する特別講義」「軍隊における女性」など18講座が用意されている。

④ 卒業生の進路

女性学を専攻または修了認定された学生の就職先は、政府・自治体などの行政、調査部門、女性関連問題を取り扱う各機関、NGOなど広い分野に開かれている。さら

女子大学の発展を探る

に人文科学系、専門職養成の大学院へ進むこともできる。他の学位専攻で、専門の研究を補足、追加するために女性に関する講座を並行して取った学生には学部、大学院それぞれ「修了証 (Certificate)」が与えられる。修了証講座は選択制である。

(8) サンフランシスコ州立大学 (San Francisco State University)

サンフランシスコ州立大学はカリフォルニア州立大学 23 キャンパスの一つで、総学生数は、学部 21,135、大学院 6,566 で、南米系以外の白人についてアジア系の学生が多く、有色人種学生はは全体の 3 分の 2 以上を占め、女子学生が 60% で 40% の男子学生を上回っている。

女性学部 (Women's Studies Department) は、学部と修士課程のプログラムを提供し、特徴は多文化と国際性である。大学院女性学専攻では、各セメスター毎に 40 以上のコース (科目) を提供している。これらは、①女性学学科で提供するもの (女性学専攻の必須科目、選択科目、特別テーマ) と②女性学学科以外の講座・プログラムで提供されるものとで構成されている。女性学専攻の学生は女性学コースを 40 単位以上取得することが必要となる。

大学院女性学専攻への入学のためには、一般的な大学院への入学資格の他、学部レベルで女性学関連科目を 9~12 単位以上履修していること。これに該当しない学生は、修士に入学を認められた後、サンフランシスコ州立大学の BA レベルの女性学コースを 9 単位分履修することが課される。

学部レベルの女性学専攻は最低女性学コースを 39 単位以上取得することが必要となっている。また、女性学副専攻では女性学コース 18 単位以上取得することが求められている。女性学副専攻の例として、女性の健康問題副専攻の学生の科目取得として次のような例がある。・女性の地位と健康・女性の健康に影響を及ぼす公共政策、・女性に保健サービスを提供する機関

(9) 全米女性学会 (National Women's Study Association)

① 沿革

全米の女性学研究の拠点であり、日本を含む海外にも多くの会員を持つ国際的な組織である。アメリカの大学で女性学が初めて講座として登場したのは 1970 年サン・ディエゴ州立大学 (カリフォルニア州) での女性学プログラムであり、以後 70 年代の女性運動の高まりに呼応するような形で女性学を授業に取り入れる大学・研究機関が全米に広がり始めた。

1977 年に創立された NWSA はその活動目的に「フェミニズムを大学内外、近隣地域、際的に広めること」をうたっている。女性学を「高等教育の研究調査や社会活動において米国内外の高騰教育の在り方を変えるきっかけとなった」と位置付け、常にその活動の中心的役割を果たしてきた。

女性学プログラムとは「女性学」関連のまとまりのある講座群で、平均 10～15 講座、多いところでは 50～75 講座／年で構成されている。「女性学」コース（講座）のみの大学はこの数に含まない。米国大学での女性学プログラムは、73 年に 78 プログラム、88 年に 519 プログラム、90 年には 621 プログラムと「20 世紀が終わるまで絶えず増え続けてきた。

2000 年には 700 数 10 プログラムが実施されるだろう」とロレッタ・ヤンガー事務局長は語っていた。ちなみに女性学で Ph. D. が取れる大学は 10 校である。

② 組織・加盟数

NWSA は理事会、評議員会、全会員参加の全国集会で構成される自治組織である。理事会は全国区、地方から選挙で選ばれた代表が構成し、評議員会は評議員コーカス（活動別部会）と地域選出の代表から成り、毎年 6 月に開かれる全国集会ですべての会員が顔を合わせる。会員数は毎年変わるが、99 年で 1800 組織／施設。日本からも個人、複数施設が加盟。ほとんどが女性男性会員は 1% 以下で例外的存在。しかしいくつかの共学大学では男性が女性学の責任者になっている。もちろん誰でも会員になれるし、「男性が女性学を学ぶのは女性を理解する上でいいこと」とヤンガー事務局長。

③ 問題点

女性学の着実な広がり一方で問題がないわけではない。その最大のものは 90 年代に始まったバックラッシュであり、それは現在も根強く存在している。ある大学では女性学の教授はそうした攻撃から講座を防衛せねばならないといった実例もある。「バックラッシュがあれば組織として守るのが我々の姿勢である」（ヤンガー事務局長）。

世代間ギャップはない。会員には若い世代から高齢者までまんべんなくいる。Sisterhood が総てを包み込んでおり、とりわけ中学、高校の教師は重要な存在と認識しているとのことであった。NWSA は税金の補助を受ける NGO なので、一切の政治活動は禁止。ただし会員が個人として活動する分は自由。全国大会の会場で会員が政治的のピラを配ったり寄付を集めるのも自由。ただし、非会員がそれをするとはできない。

④ 「女性学」という呼称について

女性に関する学問にはいろいろな呼び方がある。最近では「ジェンダー」という呼び方が研究者・学者の間で人気があるが、女性学プログラムで使われている学術用語としては「女性学 (women's studies)」が 95% で圧倒的に多い。あとの 5% は「ジェンダー学」「フェミニスト学」「女性と少数民族学」「社会における男性女性学」など。

女子大学の発展を探る

(日本でも“流行”の「ジェンダー学(論)」は案外少ない)

⑤ 加盟するには

NWSA は大学や小中、高校、また地域で女性学教育を進め広げようという人には誰にでも門戸を開いている。会費は学生や活動家らの \$25 から個人会員 \$95, また終身会員には \$1200 と幅がある。団体会員は \$70 から \$200 まで、また 5 年間会員は \$800 である。

10 女子大学連合 (Women's College Coalition)

① 概要

女子大学連合 (WCC: Women's College Coalition) は、カナダの女子大 1 校を含む 73 の女子大学連合としてスタートし、現在のメンバーは 63 である。事務局はワシントン DC で 2 つの女子大学の 1 つであるトリニティ・カレッジに所在している。63 女子大は、東部を中心とした 24 州に存在し、カリフォルニア州には 3 校のみとなっている。平均学生数は 1000 人程度で 3~400 の学生数の小規模女子大学もある。

WCC の現在の重要な調査研究テーマは、女子教育、教育におけるジェンダー平等であり、その他に、数学、科学、工学分野への女性の参入、社会における女性のリーダーシップ開発である。

② なぜ今、女子大学か⁽⁵⁾

創設の精神に戻り、学生たちに技術を身に付けさせ、リーダーとしての自信を持たせ、女子大学として存在する事に使命感を持っている大学だけが生き残った。1992 年からは女子大学の復興期で応募者が増加しその質も向上している。

WCC は女子大学について父母の意識調査を実施したが、それによると、Returning students (いわゆる社会人学生) は自分で稼いだお金で大学に行くのでその価値が最もある大学を選ぶ。すなわち付加価値のつく女子大を選ぶという結果となっている。

③ 女子大学の特徴と優位性

女子大学の半数は週末大学を持ったり、アウトリーチをするなどの違いを作り、共学大学に影響を及ぼしているという実績からも女子大学は優れている。政治や経済・経営の分野だけでなく、科学分野でも女性指導者を輩出している。

(i) 女子大学の特徴として次のようなことが挙げられる。

- アメリカの女子大学長の 90% (共学では 16%)、教員の 55% は女性であり、女子学生のロールモデルとなっている。
- 出席率が良く、卒業率も高い
- 学問的、人間発達の、人格的に共学より良い成果を出している

- ・伝統的に男性の分野と思われている分野を専攻する学生が多い
 - ・キャリア的により成功率が高い。
 - ・女子大は：
 - 全国で最も素敵な寄宿舎を持った 10 大学の 70%，最も美しいキャンパスをもつ 10 大学の 20%，最もおいしい学生食堂をもつ 10 大学の 20%，最も優れた奨学金などの支援をしている 10 大学のうち 20%
 - ・クラスあたり学生数 20 人以下の割合が高い
 - ・最も高い卒業率（中途退学が少ない）全国トップ 25 人文系大学の 12% は女子大学
 - ・全国トップ 25 人文科学系大学の 20% は女子大学
 - ・10 女子大学のうち 9 は他大学との単位互換制度を持っている。
- (ii) 女子大学の卒業生は、次に挙げるように圧倒的に数の多い共学大学卒業生に比べて社会的に成功例が高い。
- ・アメリカ企業で 50 人の傑出した女性企業家のうち 15 人（30%）が女子大学卒業生。（女子大学卒業生は大学卒業女子学生全体の 4%）
 - ・フォーチュン誌トップ 1000 会社の女性重役の 33%
 - ・15 人の大統領夫人のうち 8 名
 - ・60 人の女性下院議員のうち 20 名
 - ・在学生一人あたりに対する卒業生の寄付金額が高い（ウェルズリーが全国一で 10,614 米ドル）など

6. 今後の取り組みに向けて

今回訪問した大学は伝統ある名門女子大学と言えるが、各大学の現状からわかるように伝統に甘んじることなく改革を重ね、新たな課題に取り組んでいる。伝統故ではなく、そうした改革の積み重ね故に、生き残り発展したことがよく理解できる。こうした成功例の蔭で、数多くの大学が姿を消している。運営上存続できなかった大学、また男女共学に姿を変えてしまった大学、などである。また女子大学は規模が小さいことから、大学が大規模化し競争が激しくなった状況の中で、運営が難しいことも予想できる。

実際、視察した大学も、男女共学化や学生数の減少などさまざまな危機に遭遇しながら、女子大学としての存在意義を大学全体が再認識し、新たな展開を打ち出している。そして、難局を乗り越え、女性の社会進出を支援する大学へと発展している。ミス・カレッジの 2020 年計画にみるように、大学の在り方を検討し将来計画をつくる自己評価の機能が大きく作用していることが読みとれる。70・80 年代の女性学の発展、女性の大学進学増加を背景に、女子大学であることがより強い存在意義を発するよう、新たな検討を続けているのである。

女子大学の発展を探る

女子大学が新たに評価されている要因は、前述の4でまとめているが、日本の女子大学、具体的には本学の将来構想検討に大いに関係すると考えられる事柄もある。18歳人口の減少、また中高年女性の再就職が増加している日本の状況において、女子大学にとって若年層のみならず社会人層を対象とすることは大きな意味を持つ。また女性が様々な領域へとヨコの進出をすると同時に、管理職など高い地位へのタテの進出も進んでいる。このように多様化した女性たちのために、社会における長期的な職業生活を見通した、女性学を中核とする学習機会を提供することも女子大学ならではの強みであり新たな課題である。

今回のアメリカ女子大学視察を契機に、本学の状況を分析し、女性の社会参加を支援するより有効な学習の場であり、生涯学習を可能にする女子大学構想の検討など、大学改革の促進につなげたい。

《注》

- (1) 亀田温子「アメリカの高等教育におけるフェミニゼーションの進行—1980年以降を中心に—」、広島大学大学教育研究センター「大学論集：第24集」1995年
- (2) 坂本辰朗著『アメリカの女性大学：危機の構造』東信堂、1999年
- (3) イスラム教徒のためのお祈り場も設置されており、多言語の聖書も備えてある。
- (4) 例えば『Working Women』1998年10月号のfor Women Onlyなど。
- (5) 以下 *Going to a women's college opened up an entire world to me*, Women's College Coalition 20p. による。

参考資料

- ・インタビュー・リスト (主なメンバー)
 - トリニティ・カレッジ/Dr. Patricia A. Weizel-O'neil (Vice President)
 - スミス・カレッジ/Dr. John M. Connolly (Provost and Dean of Faculty), Ms. Susan Van Dyne (Program Chair, Women's Studies)
 - マウントホリヨーク・カレッジ/Dr. Joanne V. Creighton (President), Prof. Donal O'Shea (Dean of Faculty)
 - ウエルズリー・カレッジ/Dr. Elena Tajima Creef, Dr. Geeta Patel, (Associate Professor, Women's Studies Department)
 - ミルズ・カレッジ/Prof. Elizabeth Potter (Professor, Women's Studies), Dr. Ruth O. Sexton (Professor, Department of English)
 - シモンズ・カレッジ/Ms. Joan Kelly (director of Executive Education, Graduate School of Management)
 - メリーランド大学/Dr. Claire G. Moses (Chair and Professor, Women's Studies Department)
 - サンフランシスコ州立大学/Prof. Inderpal Grewal (Professor, Department of Women's Studies)
 - 女子大学連合 (WCC)/Dr. Jadwiga Sebrechts (President)
 - 全米女性学学会 (NWSA)/Ms. Loretta Younger (National Executive Administrator)